

スウェーデンの森は、 IoTの森だった。

林業が、
先進ビジネスになっていた。
日本へのヒントが
あると思った。

「日本切ったら、一本植える、スウェーデンの森のルールです。森のオーナーの言葉に、スウェーデンという国の「意思」を感じた。ペーナムという小さな町。夏の初めの空は、この国の気候のブルーより淡く、穏やかな空を想う。ブナの葉が、風に悠然と揺れている。日本のように高い山や深い谷の地形ではない。草原がそのまよ深い森に広がっていた。森を守りながら、林業というビジネスも成長させていく。この国の林業は、極めて計画的だ。どの種類の、どの太さの、どの長さの丸太が、需要があるのか。そのために、どのエリアの、どの木を切り、どれだけの丸太を生産すれば、ムダな伐採をすることなく売上げを増やせるのか。見える化された地形データ、木材の個体データ、それに森のオーナーの経験を加味して判断された伐採計画が、コマツのトラクター・ネットワーキに入力される。朝、時、コックピットに座ったオペレーターは、データにアクセスし伐採計画を確認する。GPSのネットワーク室内に促って、現場へ向かう。そこにはあったのは、ただ美しいだけの森ではなかった。木と人と機械と市場がデータでつながった森だった。

目覚めた森の男を思わせる赤い手袋、丸太の幹を掴んだ。ハーベスター（収穫する器）と呼ばれるマシンだ。高さ20m、直径40cmほどの木が勢いに倒れる。オペレーターは、左右のレバーと20ほどもあるボタンを駆使し、マシンを自在に操っていき、その姿は、映画に登場する巨大なロボットと操縦士のようには見えぬ。マシンの手は、枝打ちと玉切りを同時に引き、決められた長さ、太さの丸太を次々に生みだしていく。空の草原は、ぜひ想像でご覧いただきたい。位置情報、丸太の長さ、太さをセンサーが読み取り、データが自動送信される。フォワーダーという運搬車が、現場に到着した。受領した丸太の位置を把握し、荷台に積んでいく。

スウェーデンにも、かつて伐採はより森が衰退した時期があった。この国は、ルールを変えたのだ。一本切った、二本植える。嵐など自然の方で倒れた木は、鳥や昆虫たちにもありのままの森を遺すために、手をつけない。この森で30年働いている男が、教えてくれた。知恵と工夫で森は育てられる。と私たちは信じています。秋の30年でも、この森は育ちました。森と人と機械をデータでつなぐスマート林業。コマツのテクノロジも、知恵と工夫のひとつなのだ。森を受取る人たちは、想っている。人は、森からたくさんものをもらって生きていくことを、スウェーデンの林業は、100年前の2倍の速さで増えたという。

人のための
道具だから。
社会のための
道具だから。



Wheel loader 951

Forwarder 845